

言語分析哲学における自己知と超越論的主観

近堂, 秀 / KONDO, Shu

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学文学部紀要 / Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University

(巻 / Volume)

68

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010050>

言語分析哲学における自己知と超越論的主観

近 堂 秀

序 自我概念をめぐる

本稿は、イマヌエル・カントの名著『純粋理性批判』の誤謬推理章における「超越論の心理学の第二誤謬推理の批判」の議論を手がかりとして、カントの自己意識論に基づいて自己知の可能性を明らかにする試みである。興味深いことに、ドナルド・デイヴィドソンは、自己という観念が還元不可能ないしは原始的か否かをディーター・ヘンリッヒからたびたび問われたと語っている⁽¹⁾。デイヴィドソンは、その場ではそう思うと答えただけであることを付け加え、その理由をごく簡単にスケッチする。デイヴィドソンにとって自我概念が還元不可能であるのは、客観的な世界、他人の心、自分自身の心の内容についての三つの知識がすべての思考の基礎となるからである。そのさい、自我概念は、「それぞれの人の世界に対する眺望が還元不可能な仕方でのどの人のそれとも異なっている」⁽²⁾と言えるような一つの意味を指示している。もっとも、デイヴィドソン自身が間接的な仕方によると冒頭で告げるように、そこで自我そのものについて考察されるわけではない。代わりに持ち出されるのが⁽³⁾、一人称代名詞「私」に関するトマス・ネーゲルの見解である。ネーゲルによれば⁽⁴⁾、「そこ」「それ」「いま」といった指標詞を含む文の解釈や真理値は発話者に依存するが、自分自身について何ごとかを観察せずとも、発話者は自分が一人称代名詞「私」であることを直接的に知っているとされる。このように、言語分析哲学における非還元主義的な立場では、一人称代名詞の特権性によって自己知が可能となると主張されている。そこで本稿は、シドニー・シュレーマイカーとロダリック・M・チザムによる自己知の議論を取り上げ、チザムのカント批判を検討したうえで、第二誤謬推理批判の解釈を通じて自己知の非還元的なあり方を明らかにする。

第一章 一人称代名詞と自己知

まず、言語分析哲学では自我概念に関してどのような議論が展開されているかを確認する。一人称代名詞の用法を考察してそこから特権的な自己知を引き出す試みは、ヘクター・N・カスタンニエーダの言語分析に遡ることができる⁽⁵⁾。カスタンニエーダが指摘したのは、一人称代名詞の「存在論的優位」⁽⁶⁾である。つまり、「私」という代名詞があらゆる名詞、対象の依存的記述、あらゆる他の指標詞に優先されるということである。これと並行する形で、一人称代名詞の用法分析でもって同定によらない自己指

示を通じた自己知の可能性を考察したのが、シューメイカーである⁽⁷⁾。シューメイカーは、ウィトゲンシュタインに従って、一人称代名詞の客観としての使用（＝「私は6インチ身長が伸びた」）と主観としての使用（＝「私は歯の痛みを感じる」）とを区別する⁽⁸⁾。特に主観としての使用を通じて発話者の知覚を表現する場合、「私」という代名詞が発話者自身であるとあらかじめ同定されている必要はない。このことから、一人称代名詞には指示対象がないとして、知覚表現を言語行為へと還元するとともに自我の特権性を認めずに、無所有権を主張する立場がある。あるいは、私が世界内に存在しないことから自我の特権性へと移行して、超越論的主観を認める立場に至る場合もある。ところが、シューメイカーによれば、いずれの立場も、内的感官を通じて自己に接近する特殊な方法がひそかに前提されているところで誤っている⁽⁹⁾。確かに、ある種の心理的述語——ピーター・F・ストローソンとカスタンニエダの表現を借りて「P*述語」と呼ばれている——の再帰的な自己帰属により、同定によらない自己指示は成立する⁽¹⁰⁾。ただし、そうした心理的述語による「しかじかのものを知覚する」という形式での自己帰属を潜在的に可能にするのは、「このしかじかのもの」という形式による指示表現を正しく使用しうることである⁽¹¹⁾。このようにシューメイカーは主張する。その後、シューメイカーは、人格同一性の問題に対するストローソンの考えを下敷きにして「疑似記憶 (quasi-remembering)」の可能性を考察し、物的状態との相関関係に裏打ちされた心理的連続性を主張するようになる⁽¹²⁾。

これに対して、カスタンニエダの言語分析を援用して、一人称代名詞の用法から引き出される自己知の直接性を強調したのが、チザムである⁽¹³⁾。チザムが出発点とするのは、命題または事態の「自己呈示 (self-presentation)」という特徴である⁽¹⁴⁾。自己呈示的な命題としては、例えば「私は憂鬱に感じる」という命題があり、こうした命題は確実に合理的には疑えない。しかも、「私」が「憂鬱に感じる」という性質を必然的に持っている事態がそこで成立している⁽¹⁵⁾。とすると、チザムによれば、自己呈示的な命題または事態は、私とその命題または事態を直接知っていなければならない。この考え方を一人称代名詞に適用すると、人が自分自身を指すのに一人称代名詞を使用するならば、その指示対象は自己で、その意義は自己が唯一の個体であることを特徴づける必然的な性質——「個体本質」ないし「このもの性」と呼ばれている——となる⁽¹⁶⁾。さらに、カスタンニエダによる再帰代名詞の用法分析に基づいて、次のように考えられる⁽¹⁷⁾。(S)「ジョーンズは彼自身が賢いと信じる」というような自己に属性を帰属させる命題は、これを量化した(Q)「次のようなx、すなわちxはジョーンズと同定され、xはxが賢いと信じるような、そうしたxがある」という命題には含意されない。つまり、(S)が自己呈示的な命題で、それによりジョーンズが自分自身に属性を帰属させるならば、(Q)によっては語られないジョーンズ固有の性質が(S)によって語られている。したがって、私は、私が高ならぬこの人であると意識することに基づいて、私自身に個体としての性質を与えることができる。このようにチザムは主張する。要するに、一人称代名詞により、私を私とする直接的な自己知が可能となるということである。ただし、命題を通じて個体としての性質を与える議論については、チザムは、のちに自身の考えを批判的に再検討して、志向性に訴えた議論に置き換えている⁽¹⁸⁾。

ところで、チザムは、みずからの主張を補強するためにヒュームとカントの論駁を試みている。「所

与は無主体的である」あるいは「自己は経験の内部に発見できない」とする立場は、ヒュームに起源を求められるが、性質とその担い手とを区別しておらず、自己自身の反省的な関係を見落としている⁽¹⁹⁾。また、カントは、一人称言明でもって何ごと也表示しない「私」を超越論的主観と名づけたが、自己そのものを知ることを手放している点でヒュームと同様の誤りに陥っている⁽²⁰⁾。このようにチザムは二人を批判している。シューメイカーが否定した、無所有権を主張する立場と超越論的主観を認める立場に、それぞれ重なり合うことに注意したい。

言語分析哲学では、シューメイカーが同定によらない自己指示に基づいて、チザムが自己呈示的な命題に基づいて非還元的な形で自己知が可能となることを主張する⁽²¹⁾。そのさい、シューメイカーとチザムの両者が無所有権を主張するヒューム的な立場と超越論的主観を認めるカント的な立場のいずれも退ける。引き続き、カント論駁に絞ってチザムの主張を検討する。

第二章 理性批判における自己知

カントは一人称代名詞「私」を超越論的主観と見なした。しかし、超越論的主観は直観の対象とは区別されなければならない、それゆえにわれわれには認識しえないので、それによって実際には何も指示されていない。このようにしてチザムはカントを論駁する⁽²²⁾。そのさいにチザムが取り上げるのは、『批判』誤謬推理章の次の二つの文である。「ところで、思考するこの私、あるいは彼、あるいはそれ(物)を通じて表象されるのは、思想の超越論的主観=x以上の何ものでもない。この主観はその述語である思想によってのみ認識され、したがってわれわれはこれだけを分離して何らの概念も決して持ちえない」(A346/B404)。「しかし、明らかなのは、属性の主観は思想に付けられている自我を通じて超越論的にのみ表示されうるが、この主観の固有性を少しも書き記さず、あるいはこの主観について総じて何ものかを見分けたり知ったりしてはいない、ということである」(A355)。チザムはこれを二つの論証として定式化する。第一の論証では、二つの前提から一つの結論が導き出される⁽²³⁾。①われわれは、事物が持つ述語とは別に、それが何であるかを知りうるのでなければ、事物について実在的には何も知りえない。②われわれは、自己または主観を知りうるすれば、それがいかなる述語を持つかを知ることによってのみ、自己または主観を知りうる。それゆえ、③われわれは自己または主体について実在的には何も知りえない。第二の論証では、三つの前提から二つの結論が導き出される⁽²⁴⁾。①私は、いかなる事物でも、私とその事物の概念を持っているのでなければ(あるいは、その事物が一つの直観のもとにありうるものでなければ)、それを直接的に意識しえない。②自我はいかなる事物の述語でもありえない。③自我は、私が自我の概念を持っているとすれば(あるいは、自我が直観の対象の一つであるとすれば)、他の諸事物の述語でもありうるであろう。それゆえ、④私は自我の概念を持っていない(あるいは、自我は直観の対象ではない)。⑤私は自我を直接的に意識しえない。チザムによれば、第一の論証では①の前提が不合理であり、第二の論証では②の前提に難点があるとされる。つまり、チザムは、一人称代名詞「私」が述語づけられえないゆえに実在的に認識不可能で、直接的に意識不可能であ

るとい主張として、カントの誤謬推理批判を解釈したうえで、カントを論駁するのである。他方、第一の論証では②の前提が、第二の論証では①の前提がそのまま受け入れられている。自我が主語として直接的に意識され、実在的に認識されうるとするのは、チザム自身の立場に他ならない。

ところが、カール・アメリクスは、チザムによるカント論駁を誤解によるとしたうえで、カントの主張をチザム自身の立場に引きつけて読む⁽²⁵⁾。これに対してアンドリュー・ブルックは、カントの主張に基づいてチザムによるカント論駁が退けられるとみる⁽²⁶⁾。手短かに言えば、アメリクスとブルックはともに、直接的に自己を知りうるとするチザムの立場を合理的心理学による自己認識と重ね合わせるが、アメリクスが自己知の直接的なあり方を修正する議論として、ブルックが人格同一性に関する自己知を否定する議論として、それぞれカントの主張を解釈するのである。チザムの立場と合理的心理学の立場の重ね合わせは直ちには受け入れがたいが、少なくとも両者の対立は特に誤謬推理章の解釈に関する問題として捉え直されうる。

アメリクスは、チザムがカントの主張として、第一版誤謬推理章の第一誤謬推理批判にある次の文言を引いているところに注目する⁽²⁷⁾。「超越論的心理学の第一の理性推論が思考の恒常的な論理的主体を内属の実在的主体の認識と言いついて、われわれにいつわりの新しい洞察を真に受けさせたところで、われわれはこれについていかなる知も持っておらず、持つこともできない」(A350)。確かにここでは、「私」という代名詞が究極的に指示するものが何かは知られえないと述べられる。ところが、アメリクスによれば、その背後では「私」という代名詞が私の根底にある何か実体的なものを指示しているとも考えられている。問題視されているのは、合理的心理学では、私という実体がどのような種類のものなのか、「単なる思考」を通じて積極的に語りえるとされることである。実際には、私の根底には実在があり、私の現実存在が直接知られうるというカントの確信がある (Vgl. B429)。しかも、第一版誤謬推理章の第一誤謬推理批判では魂の実体性が否定されておらず、第二誤謬推理批判ではヌーメノンの非唯物論が展開されている。このようにして、アメリクスは、誤謬推理章の解釈として物自体を非物質的とする主張を引き出し、これをもって直接的な自己知を可能とするチザムの主張を裏づける。

他方、ブルックは、合理的心理学の主張が現代にあっても生き残っており、心の通時的な持続という自己知がチザムやリチャード・スウィンバーンによって擁護されているとする⁽²⁸⁾。ブルックによれば、カントは、第一版誤謬推理章の第二誤謬推理批判では、合理的心理学に対して次のような自己知のあり方を主張する⁽²⁹⁾。すなわち、①われわれは、主観を「超越論的」に表示するとき、「この主観の性質を少しも書き記さず」(A355)、主観を意識する。それゆえ、②自己の帰属的意識、自己自身の性質としてそれを意識することは、自己自身として単に「自己を意識すること、つまり自己を非帰属的に意識する自己意識を「前提する」(カント)、あるいは「潜在的に可能なもの」(シューメイカー)にする、という自己知のあり方である。②の主張は、自己の性質として自己の何ごとかを意識するために、その性質を意識することから独立した仕方では自己を意識しなければならないとする「ネーゲル=カスタンニエダ=シューメイカー論証」によって支持される。さらに、②の主張は、カントによって①の論証を通じて裏づけられる。このようにして、ブルックは、誤謬推理章の解釈として自己知とは異なる自己意識が

自己知に前提されるとする主張を引き出し、これをもってチザムによるカント論駁を否定する。

カントによれば、一人称代名詞「私」は、直接的に意識されえず、実在的に認識されえない。しかし、自我が直接的に意識され、実在的に認識されうる。このようにチザムは主張する。これに対してアメリカスは、誤謬推理批判では物自体が非物質的であることが明らかにされているとして、カントの立場をチザムの主張に引きつける。他方、ブルックは、誤謬推理批判では自己意識が自己知に前提されることが明らかにされているとして、カントの立場からチザムの主張を否定する。特に第一版誤謬推理章の第二誤謬推理批判に関するアメリカスとブルックの解釈の違いは決定的である。この点についてさらに検討する。

第三章 第二誤謬推理批判の内容

『批判』第一版の誤謬推理章の「超越論的心理学の第二誤謬推理の批判」の内容は以下の通りである。まず、第一誤謬推理と同様に、合理的心理学による魂の「単純性 (Simplizität)」の証明が三段論法の形式で提示される。

その働き (Handlung) が多くの働く物の競合 (Konkurrenz) とは決して見なされえないような物は、単純 (einfach) である。

ところで、魂あるいは思考する自我は、そうしたものである。

それゆえ、云々。(A351)

次に、偶有性として「働き」が分配されている多くの実体はその「競合」から外的な「作用 (Wirkung)」が生じうるが、偶有性として「思想 (Gedanke)」が内属している思考する存在はこれと事情が異なることが説明される。さらに、魂の単純性の証明の「主要根拠 (nervus probandi)」として、「多くの表象は、一つの思想を形成するためには、思考する主観の絶対的単一性 (absolute Einheit) の内に含まれていなければならない」(A353) という命題が挙げられる。そのうえで、合理的心理学による魂の単純性の証明が誤謬推理であることが示される。魂の単純性の証明の主要根拠は、アプリアリに概念から証明されうる同一的＝分析的命題でもなければ、アプリアリに概念から認識される総合的命題でもなく、経験から導出されうるわけでもない。したがって、思考する存在者の絶対的単一性は、あくまで統覚の「直接的表現 (unmittelbarer Ausdruck)」であり、「超越論的」にのみ「表示 (bezeichnen)」される (Vgl. A355)。自我を通じて主観の「論理的単一性 (logische Einheit)」は思考されるが、主体の「現実的単純性 (wirkliche Einfachheit)」は認識されない。このようにして、合理的心理学による魂の単純性の証明が退けられる。

三段論法に媒概念曖昧の虚偽が指摘される第一版誤謬推理章の結論的な箇所には、次のような具体的な説明がある。「だから、単純性の誤謬推理における実体の概念は純粹知性概念であり、これは感性的

直観の制約を欠いて超越論的に使用されている、つまり全く使用されていない」(Vgl. A403)。魂の単純性の証明もまた、媒概念が大前提では実在的意義として、小前提では論理的意義として使用されており、媒概念曖昧の虚偽を犯している。媒概念である「働く物」は、大前提では「一つの作用が内属する実体」を、小前提では「一つの思想が内属する主観」を指す。その結果、カテゴリーの超越論的使用により「働く物」を単純とする大前提のもとに、内的経験の超越論的対象としての魂を「働く物」とする小前提が包摂され、カテゴリーの経験的使用により魂は単純であるという結論が引き出されているのである⁽³⁰⁾。第二版誤謬推理章の第二誤謬推理批判でもまた、統覚の自我は単数であり、論理的に単純な主観を表示することが主張される。ただし、これが総合的命題ではなく分析的命題であり、感性的直観がそこで度外視されて、思考のみが問題になっていることが強調される点で、第一版と第二版の第二誤謬推理は異なる⁽³¹⁾。

第一版と第二版いずれの第二誤謬推理批判についてもその要点は、思考する自我である魂が内的経験の超越論的対象として想定され、これに質として単純性が帰属されるが、超越論的主観の質として論理的単一性が示されるにすぎないとする主張にある。ただし、第一版では次のような議論が付け加えられている(Vgl. A356ff.)。「私は実体である」という命題が表現するのは純粹カテゴリーであり、「私は単純な実体である」という命題には多様なものの総合が含まれていない。ところが、誤ってこの命題が「魂は物的ではない」と表現されたとしても、魂と物質との異種性あるいは親近性が示されているわけではない。確かに思考する主観は内的感官の対象であって外的感官の対象ではなく、その思想や意識、欲求は外的に直観されえない。しかし、外的現象の根底にある何かは、超越論的対象と見なされるならば、内的現象の根底にある思想の主観でもありうる。それゆえ、超越論的対象に外的感官の述語が付与されるか、内的感官の述語が付与されるかは認識されるにせよ、超越論的対象としての魂と物質は区別されえない。また、物自体としての魂と現象としての物質とが同じ種類のものであるかという問いは不適切であるが、魂と英知的なものとが内的に異なっているとも言えない。第一版ではこうした議論が展開されているのである。さらに、「魂(特殊な種類の実体としての)のみが思考するという表現は廃止されるに違いない」として、次のように述べられる。「むしろ、普通に言われているように、人間が思考すると言われるであろう。換言するならば、外的現象としては広がりを持っているその同じものが内的には(それ自体で)、合成されているのではなく、単純な、思考する主観である」(A359f.)。人間が思考するという命題のもと、外的現象の対象が内的には単なる思考する主観であるとされたうえで、単純な質により外的感官の超越論的対象と内的感官の超越論的対象が区別されえないところに超越論的主観としての人間が見いだされていると考えられる。加えて、人間という表現には、身心の親近性を介した一般性が想定されていることもうかがわれる。

以上が第一版と第二版誤謬推理章の第二誤謬推理批判の内容である。三段論法による魂の単純性の証明は、「単純性」が両義的に用いられているので、媒概念曖昧の虚偽を犯している。思考する存在者の絶対的単一性では、身心の親近性を介して人間一般へと至るような超越論的主観の質として論理的単一性が意識される以外、魂の単純性として主体の現実的単純性が認識されるわけではない。このようにし

て魂の単純性の第二誤謬推理は退けられている。

第四章 「思考する自我」の質的単一性

では、第二誤謬推理批判の議論を通じて、言語分析哲学における自己知の問題に対してどのように答えられるか。最後に、第二誤謬推理批判の自己意識論としての意義を明らかにしたうえで、シューメイカーとチザムによる自己知の議論に対してカントの立場から答えることを試みる。

第二誤謬推理批判の議論では、「思考する自我」の単純性は、統覚の直接的表現として超越論的に表示された主観の論理的単一性と見なされるべきとされる。「思考する私」として自己を意識するさいの自己は、単なる自己として超越論的主観を指し、これにより人間として思考することが可能になる。単なる自己として、思考する人間一般として、つまり超越論的主観としてみずからを意識するならば、その論理的単一性を介して多くの主観の間で思想が共有されうようになるというカントの考えを明らかにする議論で鍵となっているのは、次の命題である。「多くの表象は、一つの思想を形成するためには、思考する主観の絶対的単一性の内に含まれていなければならない」。カントによれば、この命題が「主要根拠」となって魂の単純性が証明され、主体の現実的単純性が認識されるのではなく、そのもとで主観の論理的単一性が超越論的に表示されるのみである。というのも、それがアプリオリに概念から証明されうる同一的＝分析的命題、アプリオリに概念から認識される総合的命題、経験から導出される命題のいずれでもないからだとされる。

ここで、超越論的主観として自己を意識することに関して、次のように誤謬推理章で述べられる箇所を参照したい (Vgl. A353f.)。「明らかなのは、人が思考する存在者を表象しようとする場合、この存在者の立場に自己自身を置き換え、その人が吟味しようとした客観にみずから自身の主観を押しつけなければならないということ (このことはいかなる他の種類の探究でも該当しない)、そして、われわれが思想のために主観の絶対的単一性が要求されるのは、そうでなければ「私は思考する (一つの表象の内の多様なもの)」とは言えなくなるからだということである。「私は思考する」という表現では「私」が単なる自己と見なされるとともに、それが思考する存在者の立場へと置き移され、超越論的主観として客観に押しつけられなければならないと考えられている。さらに、このことが明らかだとされる理由について、次のように続けられる。「たとえ思想の全体が分割されて多くの主観の間で分配されたとしても、主観的な自我は分割分配されえないが、にもかかわらずわれわれはすべての思考にさいしてこの自我を前提するからである」。客観的妥当性と万人にとっての必然的な普遍妥当性とを「交換概念 (Wechselbegriff)」(IV, 298) とみるカントにとってはあくまで非現実的な仮定であるが、多くの主観の間で思想が分割分配されうる可能性が考慮されたうえで、「主観的な自我」が前提となることが指摘されている。つまり、超越論的主観として意識されるべき自我は、それぞれの主観の特殊性がいっさい捨象されうるような普遍性を持つために、質として絶対的単一性が要求されるので、単なる自己と表現されなければならないのである。

とすると、自己の超越論的な表示による人間が思考するという表現を通じて、超越論的統覚ないしは自己意識の超越論的統一における根源的統覚と純粹統覚という二つの側面の存在論的な意味が浮かび上がってくることになる。「根源的 (ursprünglich)」と「純粹 (rein)」という二つの表現の結びつきには人間一般としての思考という意味が読み取られるのである。『批判』の分析論における純粹悟性概念の超越論的演繹では、根源的統覚と表現される場合には対象との関係に (Vgl. A111, A122f., B132), 純粹統覚と表現される場合には自己自身との関係に (Vgl. A116, B132), それぞれ力点が置かれて自己意識のあり方が説明される。さらに、対象との関係に力点が置かれて統覚の総合的統一について説明される箇所では、その統一が根源的であると (Vgl. A118, B135f.), 自己自身との関係に力点が置かれて自己の同一性について説明される箇所では、その同一性が「汎通的 (durchgängig)」であると (Vgl. A111, B132f.), それぞれ形容される。根源的という語は、他から導出されていないゆえに証明不要な、という数学的ないしは論理的な意味を下敷きにして (Vgl. A727/B755Anm.), 理性批判を通じて根拠づけられることを示している。他方、汎通的という語は、神学的な議論のなかで「汎通的規定」という表現に用いられており、物のあらゆる可能的な述語をその反対と比較する限りでその内の一つを物に帰属しなければならない場合、そうした述語で規定することを示している (Vgl. A571f./B599f.)。ところが、『批判』の理想章の冒頭では、「全完全性における人間性」は、すべての対立する述語の一方のみが最も完全な人間という理念に適しうるので、概念における人間の本質的な固有性すべてとともに、「理念を汎通的に規定するために要するすべてを含んでいる」と述べられる (Vgl. A568/B596)。さらに、神的悟性の理念は、プラトンにとっては純粹直観における「神的悟性の単一の対象」で、あらゆる種類の可能的存在者のなかで「最も完全な存在者」で、そして「現象におけるあらゆる模像の根源的根拠 (Urgrund)」であったと付け加えられる (Vgl. *ibid*)。また、理想章の導入的議論では、「物の (その内容に従って多様なものの総合の) すべての可能性」が「派生的」で、「すべての実在性を自己の内に蔵するものの可能性」のみが「根源的」と見なされると述べられる (Vgl. A578/B606)。理想章での用語法を踏まえつつ、二つの表現に注意して自己意識の超越論的統一に関する議論を見直すならば、カントが言おうとしていたことを汲み取ることができる。すなわち、他からの導出が証明されないような現象における実在性の根拠となるので、統覚の総合的統一が根源的と⁽³²⁾、思考という述語で規定された人間の理念に適するので、純粹統覚における自己の同一性が汎通的と⁽³³⁾、それぞれ形容されるのである。したがって、人間が思考するという表現では、超越論的統覚ないしは自己意識の超越論的統一という自己知のあり方と結びついて、人間一般が指し示されていると考えられる。

さて、アメリカスは、思想の統一に関する命題を根拠とする魂の単純性の証明に対して第二誤謬推理批判ではカントが疑念を述べているにすぎないと解釈して、潜在的にはカント本来の立場がヌーメノンの非唯物論にあったと評価する⁽³⁴⁾。他方、ブルックは、この命題から表象の主観と自己意識に関する証明を引き出す過程を再構成して、唯物論とも整合しうるように、同定によらない自己指示が超越論的な表示として可能であるとする主張を取り出す⁽³⁵⁾。第二誤謬推理批判の自己意識論に従って評価するならば、アメリカスの解釈よりもブルックの解釈の方が見込みはあることになる。加えて、アメリカス

の解釈では思想発展史に解釈の根拠が求められているが、思想発展史と思想体系の両面についてクレンメからの厳しい批判がある⁽³⁶⁾。もっとも、シューメイカーの主張と比較すると、ブルックの解釈には不十分さも指摘しなければならない。シューメイカーによれば、心理的述語による自己帰属を潜在的に可能にするのは、あくまで指示表現を正しく使用しうることである。ブルックはこれを見落としている。言語分析哲学の観点からみるならば、ブルックの解釈では、意味と指示に関わる権利問題が表象に一元化する事実問題へと引き下げられ、客観的なもの、間主観的なもの、主観的なものを区別する可能性が表象主義のもとで看過されているとも言えよう。

結 論

以上の検討により、本稿は、第二誤謬推理批判の自己意識論では自己の超越論的な表示を通じて次のような自己知のあり方が裏づけられることを明らかにした。すなわち、自己意識には人間一般と見なされうる単なる自己が前提されるという自己知のあり方である。したがって、超越論的主観として自己を意識するというカントの考えに基づいて非還元的な形で、自己呈示的な命題によって自己知が可能になるとするチザムの主張が退けられると同時に、同定によらない自己指示によって自己知が可能となるとするシューメイカーの主張が裏づけられると解釈される。同定によらない自己指示というシューメイカーの主張が自己の超越論的な表示によって裏づけられるならば、さらに自己知における非還元的アプローチの可能性が認められるが、この点については別の機会に検討したい。

注

カントの著作からの引用や参照箇所については、慣例にしたがって『純粋理性批判』の原版第一版を A、第二版を B として本文中に頁数を表記し、その他の引用などについては、すべてアカデミー版の巻数と頁数で示した。

- (1) D. Davidson, *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford 2001, pp. 85ff. (『主観的、間主観的、客観的』清塚邦彦、柏端達也、篠原成彦訳、春秋社、二〇〇七年、一四三頁以下)
- (2) Davidson, *ibid.*, p. 86. (前掲訳書、一四五頁)
- (3) Davidson, *ibid.*, p. 85f. (前掲訳書、一四四頁)
- (4) T. Nagel, *The view from nowhere*, Oxford 1986, pp. 54ff.
- (5) H-N. Castañeda, *The Phenomeno-Logic of the I, Essays on Self-Consciousness*, Edited by J. G. Hart and T. Kapitan, Indiana University Press 1999, pp. 35ff.
- (6) Castañeda, *ibid.*, p. 47.
- (7) S. Shoemaker, *Identity, Cause, and Mind, Philosophical Essays*, Expanded Edition, Oxford 2003, pp. 6ff.
- (8) Shoemaker, *ibid.*, p. 7.
- (9) Shoemaker, *ibid.*, pp. 11ff.
- (10) Shoemaker, *ibid.*, pp. 15ff.
- (11) Shoemaker, *ibid.*, p. 18.
- (12) Shoemaker, *ibid.*, p. 24f., S. Shoemaker and R. Swinburne, *Personal Identity*, Basil Blackwell 1984.

(『人格の同一性』寺中平治訳, 産業図書, 一九八六年)

- (13) R. M. Chisholm, *Person and Object, A Metaphysical Study*, Open Court 1976, pp. 23ff. (『人と対象 形而上学的研究』中堀誠二訳, みすず書房, 一九九一年, 一九頁以下)
- (14) Chisholm, *ibid.*, pp. 25ff. (前掲訳書, 二三頁以下)
- (15) Chisholm, *ibid.*, pp. 27ff. (前掲訳書, 二八頁以下)
- (16) Chisholm, *ibid.*, pp. 30f. (前掲訳書, 三三頁以下)
- (17) Chisholm, *ibid.*, pp. 36f. (前掲訳書, 四五頁以下)
- (18) R. M. Chisholm, *The First Person, An Essay on Reference and Intentionality*, the University of Minnesota Press 1981.
- (19) Chisholm, *Person and Object*, pp. 37ff. (前掲訳書, 四七頁以下)
- (20) Chisholm, *ibid.*, pp. 41ff. (前掲訳書, 五四頁以下)
- (21) シューメイカーとチザムの議論については, 次の邦語文献に多くを負っている。湯浅正彦『超越論的自我論の系譜——カント・フィヒテから心の哲学・ヘンリッヒへ——』, 晃洋書房, 二〇〇九年)。
- (22) Chisholm, *ibid.*, pp. 41ff. (前掲訳書, 五四頁以下)
- (23) Chisholm, *ibid.*, pp. 43f. (前掲訳書, 五七頁以下)
- (24) Chisholm, *ibid.*, pp. 44f. (前掲訳書, 五九頁以下)
- (25) K. Ameriks, *Kant's Theory of Mind. An Analysis of the Paralogisms of Pure Reason*, New Edition, Oxford 2000, pp. 71f.
- (26) A. Brook, *Kant and the Mind*, Cambridge 1994, pp. 152ff.
- (27) Ameriks, *ibid.*, p. 72.
- (28) Brook, *ibid.*, p. 113.
- (29) Brook, *ibid.*, p. 76.
- (30) クレンメは, 絶対的な主観的単一性を絶対的な客観的単一性と解する誤りとして, これを説明する。Vgl. H. F. Klemme, *Kants Philosophie des Subjekts: Systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Verhältnis von Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis* (Kant-Forschungen; Bd. 7), Hamburg: Meiner 1996, S. 320f.
- (31) その他, 第二版誤謬推理章にはメンデルスゾーン論駁が付け加えられている。メンデルスゾーンが魂の消滅を不可能とする根拠は, 単純なものの存在と非存在との連続性を不可能とするところにある。しかし, 魂の能力としての実在性の度によって, これが否定される。このようにしてカントはメンデルスゾーンの議論を退ける。また, 二律背反章の第二律背反の議論では, 世界全体を合成する単純なものの存在を肯定する定立と否定する反定立のいずれも偽とされる。第二律背反の議論との体系的整合性に関しては, 次の文献を参照。Klemme, *a. a. O.*, S. 322ff.
- (32) 根源的という表現の意味に関しては, 邦語文献では次のものを参照。山根雄一郎『〈根源的獲得〉の哲学——カント批判哲学への新視角——』, 東京大学出版会, 二〇〇五年。
- (33) 自己の同一性が第三誤謬推理批判を通じて裏づけられることについては, 次の拙論を参照。「人格同一性と理性の自己認識」, 日本倫理学会編『倫理学年報』第五六号所収, 二〇〇七年。
- (34) アメリクスは, 現象的非唯物論, 科学的非唯物論, フェノメノンの非唯物論, ヌーメノンの非唯物論, 超越論的非唯物論という五つのタイプを分類し, 魂の非物質性の証明を「形而上学講義 L1」から引き出す。そのうえで, アメリクスは, これと対比しつつ, 『批判』第一版の誤謬推理を解釈する。「形而上学的講義 L1」では, 異なった実体の内では思想の統一を持ちえないこと, 内的感官の対象であって外的感官の対象ではないこと, 物質的で単純なものは存在しえないことに訴えて, 魂が単純で非物質的であることが証明されていた。ところが, 批判期になると, 超越論的な意味では唯物論は排除されえないとされたうえで, 唯心論や靈魂主義の誤謬と証明の欠如が指摘され, ライプニッツ的な観念論が拒絶された。これはカントがバランスのとれた立場をとろうとしたためである。実際には, カントは, 現象的, 科学的, フェノメノン, ヌーメノンのいずれの意味でも非唯物論に問題はないと感じていた。それゆえ, 第一版第二誤謬推理批判では第二誤謬推理批判と同様

に魂の単純性の証明に対しては形式的な誤謬が明示されておらず、思想の統一に訴えた証明に対しては単なる疑いが述べられたにすぎない。このように解釈して、アメリクスは、カントの本来的な立場としてヌーメノンの非唯物論を評価する。cf. Ameriks, *ibid.*, pp. 25ff.

- (35) ブルックは、合理的心理学の論証として、①思想の統一に訴えた論証、②表象に訴えた論証、③自己意識に訴えた論証があることを指摘する。①統一論証によれば、複数の表象が一つの表象の対象として表象されるには、複数の表象は一つの主観一般を持っており、表象する作用の内で一つの主観一般について一つのものとして写像されなければならないので、多元性としては写像されえない。②表象論証によれば、表象の主観としてのあり方の観点から、主観は一つのものとして写像されなければならないので、複数性としては写像されえない。③自己意識論証によれば、私が私自身を主観として意識するならば、私は一つのものとして私に現象して、それが一つのものとして写像されなければならないので、複数性として現象されえない。これに対してカントは、統一に訴えた論証では魂の単純性が推論されえないと考えたうえで、表象に訴えた論証から自己意識に訴えた論証へと力点を置き移し、超越論的な表示という着想でもって合理的心理学を退けることになった。このように解釈して、ブルックは、カントによる自己知のあり方を明らかにする。cf. Brook, *ibid.*, pp. 165ff.
- (36) Vgl. Klemme, *a. a. O.*, S. 328f.

Die Selbsterkenntnis in der sprachanalytischen Philosophie und das transzendente Subjekt

KONDO Shu

Zusammenfassung

In dieser Abhandlung wird die Möglichkeit der Selbsterkenntnis in der sprachanalytischen Philosophie aufgrund von der Selbstbewußtseinstheorie Kants aufgezeigt. In der sprachanalytischen Philosophie findet Shoemaker die Selbstreferenz ohne Identifikation im Selbstbewußtsein, während Chisholm die Möglichkeit der Selbsterkenntnis durch den Satz von der Selbstvorstellung behauptet. Zugleich leugnen Shoemaker und Chisholm das kantische transzendente Subjekt ab. Aber in der ersten Auflage der *Kritik der reinen Vernunft* erhellte die transzendente Bezeichnung für das Selbst aus der Kritik des zweiten Paralogismus der transzendentalen Psychologie. Das Ich von der transzendentalen Einheit wird unmittelbar als einfach bezeichnet und dadurch wird der Gedanke mittelbar gemacht. Also nach Kant wird die Selbsterkenntnis durch die Selbstreferenz in der transzendentalen Bezeichnung für das Selbst möglich gemacht.

Schlüsselwörter: Selbsterkenntnis, Selbstreferenz, transzendentes Subjekt, Paralogismus